

SUBURBIA SUITE

summer beauty issue

ピチカート・ファイヴのことを考えるとき、どうしてもジャン・リュック・ゴダールのことを考えずにはられない。

『最新型のピチカート・ファイヴ』に始まり『超音速のピチカート・ファイヴ』『レディメイドのピチカート・ファイヴ』と続くミニ・アルバム三部作(彼らの呼び方に倣うならepcd)、そしてフル・アルバム『女性上位時代』へと続く驚くべきリリース・ラッシュは、ゴダールが『メイド・イン・USA』と『彼女について知っている二、三の事柄』をほとんど同時進行で撮影していたというエピソードを思い起こさずにはられないほどだ。

そう、ピチカート・ファイヴのレコードは、まるでゴダールの映画のように馬鹿けていて、無邪気で、気まぐれだ。ゴダールのように下手くそで、突飛で、美しい。ゴダールのように飽きっぽく、難解で、優雅で、術学的で、退屈だ。そしてピチカート・ファイヴの音楽は、ゴダールの映画のように傲慢で、不遜で、絶望的なほど悲しい。

だからピチカート・ファイヴのニュー・アルバムはいつも、まるでゴダールの映画を封切りの日の

第一回上映で観るように、その発売日の午前中にレコード・ショップに駆けつけて、手に入れなくてはならないのだ。

もちろん今回の主演女優は野宮真貴。

元ポータブル・ロック。その前は日本で最初のニュー・ウェイヴ・アイドルだった。「トゥイギー・トゥイギー」という歌を歌ってから10年経って、彼女は相変わらずそのまま。相変わらずの透明な声で、相変わらず瘦せっぽちだ。ポータブル・ロックであろうと、ピチカート・ファイヴであろうと、野宮真貴はいつも野宮真貴のまま。

'60年代、外国TV映画全盛の時代に吹き替え専門に大活躍していた水垣洋子という声優をご存じだろうか。当時のドライでキュートな現代娘、といった役どころは、ほとんど必ず彼女が吹き替えていた。小西康陽にとって永遠の理想のヴォイスは彼女、水垣洋子の声なのだという。そして野宮真貴の声はひどく水垣洋子に似ているのだ。

だから今回の一連のシリーズで、野宮真貴はひたすら喋り続けさせられている。水垣洋子へのオマージュ。ナレーションという手法に深く傾倒しているかに見えるピチカート・ファイヴだが、いっぽう小西康陽は「大人にならなう」ほか今回のレコーディングで作った曲の、水垣洋子による吹き込みを真剣に考えているのだという。

アート・ディレクターはおなじみ信藤三雄。今回は『最新型』に始まる4枚のアルバムのジャケット写真の撮影のために、メンバーと信藤氏、そしてカメラマンの鶴田直樹氏が湾岸戦争終結の翌日、パリに飛んだ。撮影に先立って、メンバーから信藤氏に提示されたアイデアは、

- 1、ガーベラの花を持つピチカート・ファイヴ
- 2、毛沢東語録を持つ野宮真貴



Quoi de neuf, pizzicato ?



- 3、ゴルバチョフ・ルック(『月面軟着陸』のあのパターン)のピチカート・ファイヴ
- 4、踊るピチカート・ファイヴ
- 5、T-REXの『SLIDER』のポートレイトを模倣する野宮真貴、など。

たくさんジャケットを作ることができるというだけの理由で今回の連続リリースを企画した、と笑うメンバーたちだが、案外と本気なかもしれない。

それにしても大胆なこのリリース・ラッシュ。TVドラマの音楽作りという仕事が舞い込んで一挙に5枚連続ということになったのだが、小西康陽は別なインタビューでこう答えている。「もししたら、『オードリー・ヘプバーン・コンプレックス』と『アクション・ペインティング』、それに『カップルズ』というレコードだけ遺して解散していたなら、今頃は伝説のグループになっていたのかもしれないけど、こうしてバンドも自分たちも年を重ねてきちゃったからね。物を創る人には二種類あって、生涯にたった一冊、傑作を書くタイプと、次から次へと作り続けるタイプ。もう僕たちは手塚治虫になるしかないと思う」

映画とは音と映像の組み合わせに過ぎない。ある物は映画で、ある物は映画ではない、というようなことはない。ゴダールはそう語った。ではピチカート・ファイヴにとって音楽とは何なのだろう。



SHIPS LTD.





Turntable Travel

ボリス・ヴィアンの『うたかたの日々』には、自動カクテル・ピアノなるものが登場する。主人公のコランは、この洒落た発明品でデューク・エリントン弾いては次々とこ機嫌なカクテルを生み出していく。かくもカクテルと音楽の関係は深く、ムード・ミュージックのジャケットには、色とりどりのカクテルが登場するけれど、その一つ一つのグラスにどんな音が秘められているのか、耳を澄ましてみるのは僕だけだろうか。緑のミモザはクールなヴァイブ。ロマンティックな女声コーラスはブラック・ヴェルヴェット。吹き抜けるサクソスはロング・アイランド・アイスティ。そしてストリングスにはもちろんシャンパンだろう。こんなに軽やかにゴージャスなカクテル・アワーなら、避暑地の甘い風に吹かれながら、快適なビーチのラウンジで過ごしたい。007シリーズで、ボンド・ガールにつきそったJBがしばしば海辺のカクテル・ラウンジに登場するように。かつてバハマやリオやニースといった皆が夢みたビーチに必ずいた、ジョージ・シリングのようにクールで、アート・ヴァン・ダムのように小粋で、マーティン・デニーのようにエキゾチックな楽団。今は失われたそんな観光地楽団の甘い響きを懐かしみながら、海辺とカクテルのジャケットを並べて、今夜はターンテーブル・トラベルと洒落こもう。

まるでゼリーのようになめらかな、ブルーと白・赤で構成された海。明るく揺れる水面に浮かぶヨット。「真夏の夜のジャズ」は、こんなふうに涼しげな夏のけだるい午後のスケッチから始まる。

バート・スターンが監督・製作・撮影をしているこの作品は、音楽映画とだけ紹介するにはもったいないほどセンスがよくってお洒落な映画なの。もう何度となく繰り返し観てるけどまったく飽きないのがうれしい。

58年のニューポート・ジャズ・フェスティバルを撮ったドキュメンタリーなのだけど、ほどよく演出された美しいフィルムに、スターンのファッション・カメラマンとしての才能が存分に発揮されているのがよくわかる。ほんとにスクリーンにあらわれる人・風景どれもがとてもスタイリッシュに撮られている。もちろん登場する人たちのセンスが凄くいいってこともあるけどね。

まず、ステージの上にいる人たち。黒のキャブリンをかぶったアニタ・オティ、ブリムの上は、彼女のハスキー・ヴォイスにあわせて揺れる真っ白な羽根でいっぱいだし、ジュリー・マリガンのカッコよさどいってたら、クルー・カットとサングラスがこんなに似合う人、他にいないんじゃないかしら。客席にいる人たちだってステージの上に負けないくらいお洒落さん揃い。夏の陽ざしに必需品のサングラス、さすが50年代だけあって女性にはキャッツ・アイ型のをしている人が多く、皆どれもなかなか凝ったつくりで可愛い。だからちょっとお行儀悪くガム噛んだって、アイスクリーム食べたって全然平気。ここはコンサート・ホールじゃないんだから。きれいな色のスカーフやサマー・ニット、涼しげな帽子、ノスタルジックな型のカメラ。どれも夏のリゾートを彩る少し感傷的な小物たち……

最後にこの映画に流れる曲は「Maryland, My Maryland」。過ぎゆく夏を見送るのにぴったりな曲だと、観るたびに思う。



JAZZ
ON A
SUMMER'S
DAY

cool fun in the summertime

Les Grandes Vacances

夏のヴァカンスをテーマにした映画を最近あまりみかけないと思いませんか？ 特にいわゆる青春映画なんてほんとにご無沙汰って感じがするのはなぜかしら。'60年代ぐらいに登場するヴァカンス映画には、いま観たっていいなって思えるものがいくつもあるんだから、シーズンが来る前にリヴァイヴアル公開してくれてもいいのに…… そうしたらいろいろと参考にできるところもあると思うんだけど。そんな願いを込めてイタリアとフランスの2本のヴァカンス青春映画を紹介します。



DICIOTTENNI AL SOLE

カトリーヌ・スパークをご存じですか？ イタリアで最も有名な避暑地であるナポリ沖合のイスキア島を舞台にした映画『太陽の下18才』で主人公を演じた女の子です。カトリーヌを知らなくても、映画を観たことがなくても、エンニオ・モリコーネ作のテーマ曲「サンライト・ツイスト」を知っている人は多いでしょう。(そういえばこの当時のイタリア映画にはやたらと「太陽」ってつくのが多い) 照りつける太陽の陽ざしを浴びてツイストを踊る陽に焼けた女の子たちのファッションは、夏のカジュアルなイタリアン・モードで、サンライト・ルックと呼ばれていたらしい。たとえば、おへそを出しちゃうベア・ミッドリフ・スタイルのものとかね。だけどこのスタイルをまねるには、トルソが美しくないとちょっと難しいのが困ったところ。あるいはカラーの小さいオフィッサー・スタイルのドレス。スリムなシルエットにあざやかな白のディッキーマットが映え、ブルームをロールしたビーチ・ハット姿のカトリーヌははたとてもキュート。

自分とよく似た名前の男の子と恋に落ちちゃうカトリーヌは可愛く、オキャンないメージ。でも何となくお嬢さんっぽいところもあるのは、パパが有名なシナリオライターで、その当時のベルギーのスパーク外相が伯父さんっていうので納得してしまう。

ところで、カトリーヌはこの映画でポーカーで負けて島から帰れなくなってしまった青年を演じたファブリチオ・カブッチとロケ中に熱烈な恋をして結婚、そして赤ちゃんが生まれたとたんにさよならしてしまいました。何とも「避暑地の出来事」っぽいエピソードだと思いませんか？



パリでは7月14日の革命記念日がすむと、ヴァカンスを楽しむためにみんな郊外へと向かうので街には誰もいなくなるとか…… ちょっとウソだけど少しホントの話。『赤と青のブルース』のマリー・ラフォレもギターと幼なじみの男友達を車に乗せて、両親に内緒で、コートダジュールの一角のサントロベへとでかけます。もちろんお金なんてないも同然！ でも何とかなっちゃうものなの。夏のせいかな、土地のせいかな？

1ページずつナイフで開きながら読むフランスの小説のように、ちょっと厄介だけど魅力的な女の子。そんなラフォレを男性が放っておくはずがありません。恋のスリルも、もちろんピンチだって軽くかわしちゃうけどね。だって海辺でせまられても一言「お腹すいた」だもの。そんなラフォレたちのバックにはアンリ・クロラ、アンドレ・オデルらによる軽快なフレンチジャズが流れます。空はどこまでも青く、海は輝いてるのに少しだけメランコリックな青春。

白いスーツにハイヒールというスタイルから、だんだんとラフなりゾート・ファッションへと変わってくるラフォレを観ると、その気持ちの変化までわかるような気がしてくるから不思議。そしてヴァカンスの終わりにには友達か恋人へと変わってる。でもきっとそういうものなのでしょう。



SAINT TROPEZ BLUES

SNAPSHOTS OF HAPPINESS



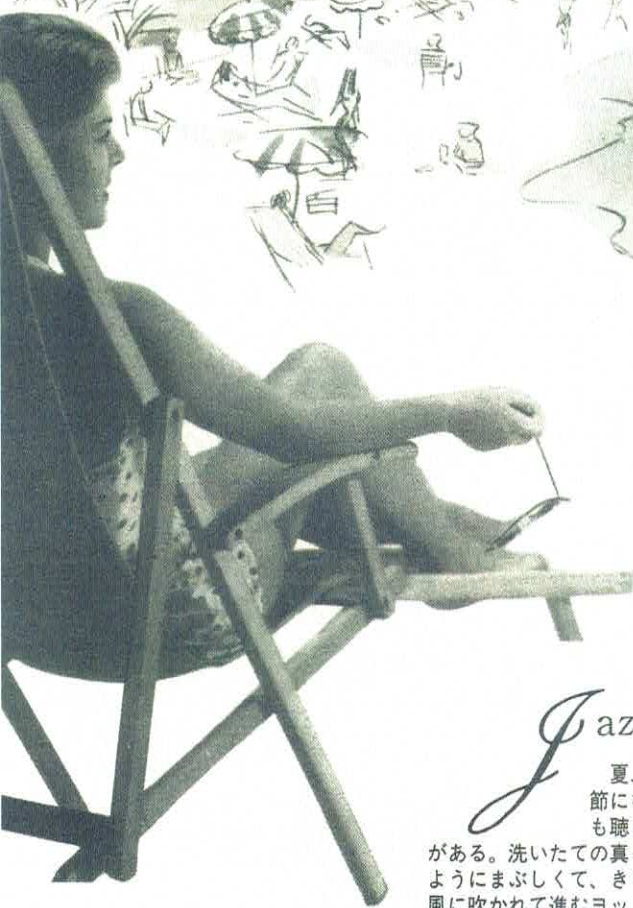
© Jacques-Henri Lartigue

時計の針を逆さまにまわしてどこにでもいけるなら、僕は迷わず、19世紀にさよならを告げて20世紀を楽しむ始めたパリを選ぶ。なぜなら、それはラルティエグの時刻だから。まだ新しかったエッフェル塔や万国博覧会の時代。衛星を通じて地球の反対側とシンクロする今と違い、万里の船旅をこえてきた一枚のタブローが空想を誘う。ジャック・アンリ・ラルティエグはそんな時代のスナップショットを撮り続けた写真家です。

ラルティエグのモノクロームのフレームに触れることは、20世紀の生まれてくるまどろみに身を浸すこと。夏の朝、プールに飛び込み、陽のきらめく水面に浮かび上がってくる浮遊感に浸ること。いつもの午後、彼は女たちや友人たちとノルマンディーの浜にいて、ご自慢のカメラを小脇にたずさえて歩く。女たちはパラソルの下であてやかに笑みを浮かべたかと思うと、古めかしい水着でしどけな寝顔をさらしている。男たちは気難しげな顔つきで砕けちる波をながめたり、波や砂とたわむれたりしている。ラルティエグはそんな瞬間を日曜画家のようなたおやかな視点で切り取っていく。白黒に焼きつけられた光景には、あの『ぼくの伯父さんの休暇』と同じウィットがあり、同じリズムが流れているのです。ジャック・タチのような人だった、なんて考えるとラルティエグがどんなに素敵なお人だったかわかるでしょう。

そして、タチがそうであるように、ラルティエグの収集した光景には、モダンな世界が揺がっています。姿をあらわしたばかりの自動車は、人に伴走されて全力疾走しているところ。帆布を張った飛行機は、まるでタコのようにゆったりと空に浮かび始めるところ。エルジュの描くTINTINのストーリーを目にした人ならピンとくる感覚かもしれません。ラルティエグの時代には、科学は冒険という言葉の裏返しだったのです。僕らが今、惹かれていく一つ一つの糸をたぐると、そこにラルティエグがいて、そのモノクロームのフレームに魅せられずにはいられないのです。

Some like



Jazz

夏、光あふれる季節になるとどうしても聴きたくなる音楽がある。洗いたての真っ白なシャツのようにまぶしくて、きらめく海面を潮風に吹かれて進むヨットのように軽やかに涼しげで…… サマーという言葉のさわやかで少しはかない響きがよく

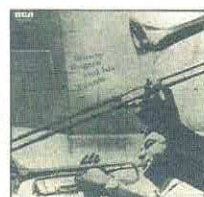
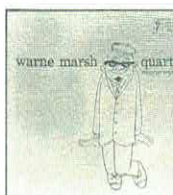
似合うので、僕はサマージャズと呼んでいる。

以前に紹介したレニー・トリスターノ六重奏団の『クール・アンド・クワイエット』などはそんな輝けるサマージャズの最高峰なのだけど、同時期の彼らのセッションを収録したリー・コニッツ名義の『サブコンシャス・リー』というレコードも素晴らしく輝いている。透き通るように美しい演奏にはもちろん、「Ice Cream Konitz」なんて曲名からうかがえるユーモアにもたまらなく惹かれてしまう。コニッツを中心としたトリスターノ門下生たちは、'50年代にも多くの名演を残している。アトランティック盤『コニッツ・ウィズ・マーシュ』ではクールな音色にまろやかさが加わり、アドリブの優雅なフォームが夏の夜の空気を優しくしてくれる。ウォーン・マーシュがその後もモードに吹き込んだ「ウォーン・マーシュ・カルテット」も星降るような美しい調べを奏でる。繊細なロニー・ボールのピアノとたわむれながら、ワンホーンでリリカルに歌うマーシュのテナーは、クール期のゲッツをも思わせる気品にあふれている。

モードは'57年にわずかの間だけハリウッドに存在した幻のレーベルだが、エヴァ・ダイアナがジャズメンのポートレイトを表情豊かに描いたペインライン・シリーズや、ウィリアム・ボックスのイラストによるジャケットで知られている。フランク・ロソリーノやリッチー・カミュカのレコードは、最高ノと叫ばずにはいられないほど陽気で楽しいサマージャズ。ルーシー・アン・ボークの『ラッキー・ルーシー・アン』も'50年代ウエストコーストらしい雰囲気にも含まれたスマートなヴォーカル盤で僕の大好きなレコードだ。

さて、そのウエストコースト。ハーモサ・ビーチにあるクラブ、ライトハウスの常連たち、ショーティ・ロジャース、バーニー・ケッセル、シェリー・マンらの演奏こそ陽光降りそそぐカリフォルニア産サマージャズの象徴だ。彼らはライトハウスで毎週日曜日に繰り広げられたハワード・ラムゼイ企画の「サンデイ・ジャズ・セッション」に参加、コンテンポラリー・レーベルから名作を次々に発表していく。その第一弾『サンデイ・ジャズ・ア・ラ・ライトハウス』は、当時にタイムスリップして、よく冷えたビールを片手に彼らのプレイを楽しんでいるような気分になれる好盤だ。コンテンポラリーは演奏だけでなく、ロバート・グイディによるスリーブ・デザインでも、サマージャズにふさわしいさわやかなユーモアをあざやかに表現している。

ライトハウス出身者の多いショーティ・ロジャース楽団の颯爽とスウィングする演奏も、ウエストコーストジャズ華やかにし頃の夏の輝きを伝えてくれる。



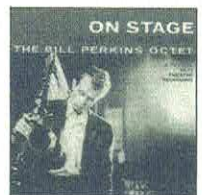
ホーン・アンサンブルの甘美な色合いはウエストならではのもの。ジミー・ジュフリーの編曲も光るクールでモダンな感覚に買われた『ショーティ・ロジャース・アンド・ヒズ・ジャイアンツ』、ベイシー楽団への敬意あふれる『コート・ザ・カウント』といった有名作はもちろん、アート・ペッパーの名ソロをフィーチャーした「虹の彼方に」を含むデビュー録音のフレッシュな演奏も素晴らしい。

このショーティ・ロジャース楽団のデビュー録音はジェリー・マリガン・テンテットの演奏とカップリングされてレコードになっている。マリガン・テンテットといえば、マーティ・ペイチがああメル・トーマの伴奏アレンジでお手本にしたほどのウエストの粋を凝縮したようなスタイル。軽快にスウィングするリズムと洗練された明るいアンサンブル。ギル・エヴァンスの影響を感じさせるスモーキーなサウンドが聴かれるのもうれしい。

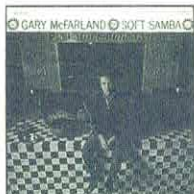
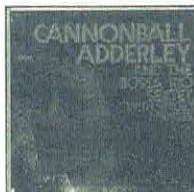
マリガンは、ライトハウスが名声を博し出したのと同じ頃ロスに移住してきて、ヘイグというクラブを中心にチェットとのピアノ・カルテットで人気を集めた。そのヘイグの会計係りチャード・ボックが設立したレーベル、パシフィック・ジャズのカatalogにはサマージャズの名盤がずらり。まずはチェット・ペイカー。軽妙で小ざっぱりしたラス・フリーマンのピアノと組んだワンホーン・カルテット、ペッパーとの共演、ストリングス、ビッグバンド、ヴォーカル。どんな編成でも、彼のレコードからはウエストらしい独得の詩情が香る。ビル・パーキンスのクール・テナーも忘れられない。有名な『グランド・エンカウンター』だけでなく、シャンクラとの『オン・ステージ』、ペッパーらとの『ジャスト・フレンズ』などのリーダー作でも極上のウエストコースト・アンサンブルが楽しめる。

ロスから600kmはなれたファンタジー・レーベルのあるサンフランシスコもサマージャズの特産地。ファンタジーといえばポール・デズモンドのアルトとカル・ジェイダーのヴァイブ。インプロヴィゼーションの中にその曲のイメージにあわせて様々な曲のメロディを織り込んでいくデズモンドの歌心あふれるフレージング、気品をたたえた澄んだトーンの音色を響かせるジェイダーのマレットさばき。ブルーベックと組んでいた頃の二人は、さわやかでスマートで清々しくて、サマージャズの魅力そのものだ。マスターサウンドもファンタジーに好盤を残しているグループ。パディ・モンゴメリーのヴァイブとリッチー・クラブトリーのピアノが絶妙にブレンドされたサウンドは、ジョージ・シアリングのソフィスティケーションと、モダン・ジャズ・カルテットのブルース・フィーリングを思わずにいられない。

僕らが夏に聴きたくなる音楽は、どれも洒落た編曲を重視したグループ表現の中に、どこか醒めたムードを漂わせている。明るくスウィングしていても決して熱くなることのないジャズメンのけだるくスマートな姿をぼんやり眺めていると、僕らがサマージャズに惹かれる理由が何となくわかってくるような気がする。



t cool



Bossa nova

夏の夜や陽が傾きかけた黄昏どきに、流しておくど気分が溶けていくのがボサノヴァの心地良さ。素敵な曲ながら流れているだけで熱帯魚の水槽のように涼しいインテリアになる。何気なく入ったお店で、ワルダ・ジ・サーの可愛いささやきや、ジャック・マーシャルのさわやかな口笛が聞こえてくるうれしい偶然。これから紹介するジャズメンの取り上げたボサノヴァは、そんな洒落な味わいを持った曲ばかり。過ぎていく毎日の中の心地良さを演出する一つ一つのエレメント。ミネラルウォーターに浮かぶミントの葉や、影の伸び始めた浜辺で砂を踏み感触。音楽そのものよりも、音楽から浮かび上がる一瞬の想い出によって記憶されるようなとおきの音だ。

まずはヴァイブ奏者ゲイリー・マクファーランドの『ソフト・サンバ』。「ロシアより愛をこめて」やビートルズ・ナンバーを柔らかなボサノヴァのリズムに乗せてリメイク。リリカルな口笛からハミングへの流れが、何ともいえずモダンな一枚だ。カバーならヘンリー・マンシーの曲をボサノヴァ・アレンジで演奏しているジャック・ウィルソンの『ブラジリアン・マンシーニ』もユニーク。上品なピアノとつまびくガット・ギター、そしてロイ・エアーズのヴァイブ。「酒とバラの日々」は、ゲイリー・パートンが奏でる「虹の彼方に」と続けて聴きたいロマンティックなスクリーン・ミュージックの傑作だ。

イージーリスニング・ボサノヴァの極めつけともいえるのが、ステイヴ・アレンの『クール、クワイエット・ボサノヴァ』。バド・シャンクやローランド・アルメイダなど、ウエスト在住のジャズメンを起用して作り上げた珠玉の名盤だ。メランコリックなメロディカやオルガンの愁いある響きとジャケットの淡い写真が優しく夜の空気になじむ。バド・シャンクのリーダー作『ブラジル! ブラジル!』もボサノヴァ風味をまぶした極上のムード音楽。チェット・ベイカーのトランペットが夏のはかなさを歌っている。

陽気なウエストコースターを象徴するアルバムならショーティ・ロジャースの『ボサノヴァ』がいい。軽快なホーン・セクションとヴァイブの絡みは、潮風に吹かれる船上パーティのようにさわやか。全編にあふれる明るいムードは、シャンパンの栓を力強く吹くとぼすときのような気持ち良さだ。

ギタース・アンリミテッドやトロンボーンズ・アンリミテッドなど、ムード音楽によくある匿名的な企画もウエストコーストのボサノヴァならではの楽しさ。カバー曲のとびきりソフトなアレンジに、思わずうっとり聴き惚れてしまう。キャノンボール・アダレイが甘美なプレイを聴かせるボサ・リオ・セクステット・ウィズ・セルジオ・メンデスとの共演盤もおすすめの一枚。快適なリズムとけだるいサクソの音色がたまらなく魅力的なレコードだ。最後はよりゴージャスなビッグバンド。クインシー・ジョーンズの『ビッグバンド・ボサノヴァ』。ドリーム・ウォリアーズがブレイク・ビーツに使った「Soul Bossa Nova」に始まるこの作品は、ラロ・シフリンとボブ・ブルックマイヤーの熱演で知られる「Samba Para Dos」が「Lalo Bossa Nova」とタイトルを変えて収録されているなど、粒よりのナンバーが揃っている。

聴き込めば必ず夏の定番になっていくボサノヴァ。そのエヴァーグリーンな魅力に加えて、'60年代にジャズメンが演奏したボサノヴァには、各時代の最も洗練された音楽だけが持つスリリングな瞬間の輝きが映し込まれている。(今のクラブシーンで、ヒップホップとミックスされたジャズが最も輝いているのとよく似ているかもしれない) そんなエヴァーグリーンでいてスリリングなところが、僕を虜にするボサノヴァの最大の魅力なのだろう。

Soundtrack

前回のR・オルトラーニとA・トロヴァヨーリに引き続き、イタリアの映画音楽家を紹介するこのコーナー。ジャズのイデオロムを生かしてクールなスコアを書いた「二人のピエロ」を取り上げてみよう。

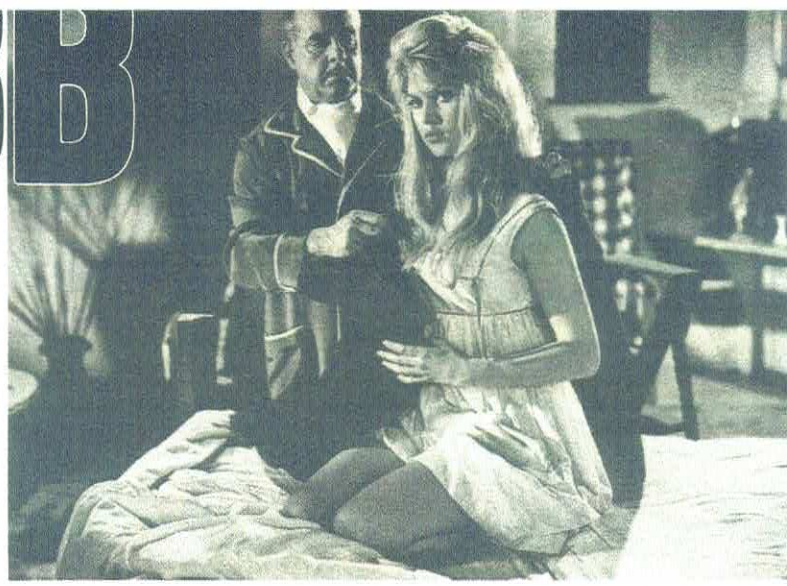
日本では公開された映画の数が少ないため、映画音楽の作曲家としてはそれほど知られていないピエロ・ウミリアーニ。むしろチェット・ベイカーやガトー・バルビエリとの共演など、ピアニスト、アレンジャーといったジャズメンとしての顔のほうがよく知られているかもしれない。深いトーンのイタリア語の詩の朗読と物憂い歌を組み合わせたTVショーをレコード化した、ヘレン・メリルの『ローマのナイトクラブで』でも、コンボ・リーダーを務め、小粋なピアノを聴かせてくれた。今年に入ってCDでリリースされた『Jazz at Cinecittà』は、ウミリアーニの魅力をあますことなく伝えるオムニバス盤。『天国か地獄か』からスカットがユーモラスな「Mah-Nà Mah-Nà」、『ポッカチオ'70』から軽快なタッチのビッグバンド・ナンバー。さらにヘレン・メリル、コンテ・カンドリ、フランコ・ロソリーノ、モリコーネ作品でおなじみのオスカル・ヴァルダンブリーニをパーソネルに迎えて、カラフルなイタリアーノ・チネ・ジャズを堪能できる。

一方の「ピエロ」、ピエロ・ピッチオーニはフランチェスコ・ローゼ監督とのコンビで有名。『I Magliari』『シシリーの黒い霧』『Le Mani sulla Citta』の洗く鋭いスコアが輝かしいコンビネーションの幕開けで、硬軟自在のあざやかな音付けが光る『真実の瞬間』、ノスタルジックな時代色を香らせる『コーザ・ノストラ』、ロマンティックなファンタジー『イタリア式奇蹟』など名作を次々に発表する。 Hammond・オルガン、ウッド・ベースをバックにテナー、トランペットがグルーヴィに絡む「Kress」「Tremendous Stars」「Dead Flowers」が白眉の『ローマに散る』は彼らの最高傑作。リナ・ウェルトミューラー監督との『流されて』はモダンジャズではないが、地中海をイメージしたクールなボサノヴァで、夏が来るたびに針を落とすようになってしまう。

洒落たウィットウミリアーニ、シャープで都会的なピッチオーニ。あなたはどちらがお好きですか？



BB



ブリジット・バルドーはモードを着ない。ほんとはそんなことないんだけどね。カルダンのドレスなんかも素敵に着こなしてるし……

たとえば、イーディス・ヘッドのコスチュームやジヴァンシーのドレスを着てるヘブバーンの魅力を、そのモードを抜きで話すことってとても難しい。でもバルドーはモードを着てなくて平気。だってシーツやバスタオルをまとっただけのバルドーはそれ以上に魅力的でしょ？ もしバルドーにドレスのファスナーを下ろすのを手伝って頼まれて、断られる自信のある人なんているのかしら？

BBの無邪気な美しさは悪魔的だってポーヴォワールが言っているけど、ほんとに美しく一番可愛いバルドーを観るなら、'50年代の映画、それもコメディを観なくちゃ。『殿方ご免遊ばせ』『気分を出してもう一度』『この神聖なお転婆娘』は、いずれもミシェル・ポワロンが監督をしている作品。（『気分を出してもう一度』には若き日のセルジュ・ゲンズブルが出てるんだけど、それがチンピラな役ですごくイイの。）

バルドーのとってもチャーミングなコメディエンヌぶりを観ていると、イニシャルで愛称でもあるBBというのがbebeであってもちろんfemmeでもあるのってこの頃のバルドーが一番なんじゃないかなって思う。そういえば、バルドーの映画はお金持ちのパパと二人暮らしって設定が多くて、ママが登場しないんだけど、その中でパパはいつもバルドーのことを子供扱いしているのです。

とにかく、およそ神様が創り得る最高の肉体を持つバルドーが、コケティッシュに楽しげに肌を露出したり、イキイキとダンスを踊るシーンを観て、そうしたらきっとバルドーのこと好きになっちゃって、モードを着てたかどうかなんて忘れちゃうから。



Triangle Blue



オーストリア映画のプリンセス役から出発し、持ち前の品の良さで人気を集めたロミー・シュナイダー。映画監督クロード・ソーテ、作曲家フィリップ・サルドとの出会いは、彼女の女優歴において重要なターニング・ポイントだった。

ロミー、ソーテ、サルドのトリオ第一作は『すぎ去りし日の……』。ここではミシェル・ピコリのモノローグを挟んで、彼女の切々とした歌が聴ける。まるでロミー本人をイメーجして書かれたのではないかと思うほど、柔らかく、伸びやかで、それでいてどこかかなげなキャラクターが伝わってくるような曲調が魅力的だ。ツバを折り曲げた麦わら帽子と黒いビキニが印象的だった『夕なぎ』は、トリオにとってハイライトといえるだろう。シンセサイザーを使ったメイン・タイトルやフリージャズなどの実験的なサウンドが、三角関係を扱ったオーソドックスなラブ・ストーリーにモダンな味付けをしていた。このトリオの作品では、『Max et les Ferailleurs』『Mado』『ありふれた愛のストーリー』も、等身大のヒロイン像にふさわしいさりげない音の演出が心に残る。

その他のロミー・シュナイダー出演作も、『太陽が知っている』『ミシェル・ルグラン』『追想』がフランソワ・ドルーベ、『Garde a Vue』『サンヌーシの女』がジョルジュ・ドルリュと、フランス映画音楽界を代表する作曲家が洗練されたスコアを書いており、これほど映画音楽によって、キャラクターを豊かに表現された女優も珍しいだろう。どの音楽を聴いても、大人の女の持つ知性、強さ、脆さが、エレガントなイメージと交錯し、彼女のしなやかな肢体とともによみがえる。フランス映画史上に残る名旋律に包まれて、ロミー・シュナイダーは永遠の存在となったのである。

SOFTER

THAN

VELVET

エンニオ・モリコーネの代表作といわれたらあなたなら何を挙げます？ 『荒野の用心棒』『夕陽のガンマン』などセルジオ・レオーネ監督とのコンビによる一連のマカロニ・ウエスタン、あるいは『アンタッチャブル』『ミッション』といった最近のアメリカ映画、なんてところが挙がるのではないのでしょうか。ここではあまりよく知られていない彼のリリカルな一面にスポットを当ててみましょう。

『Menage all'Italiana』はボサノヴァ、ロック、カンタータを織り込んで、恋愛を甘美にそしてポップに歌い上げる。モリコーネが映画音楽界のバハであることを顕著に示した好例だ。ラテン・タッチが楽しい『盗みのプロ武隊』にはサンバがふんだんに盛り込まれている。コミカルでせつないタイトル曲のトランペットはハーブ・アルバートのパロディだろうか。妖しい女声ヴォーカルで始まるのは『イタリア式愛のテクニク』。カントーリ・モデルニのピアノとオーケストラ演奏は全身がとろけてしまいそうなほど官能的。テーマ曲のヴァリエーションで構成された『彼女と彼』は表情の豊かさを堪能してほしい。どの曲もロマンティックで美しいアレンジばかりだから。モリコーネの最高傑作との呼び声も高い『Metti, una Sera a Cena』。エッダ・デル・オルソのスクヤットをフィーチャーしたタイトル曲を筆頭に、練り広げられるサウンドすべてが陶酔の世界へと導いてくれる。『Il Gatto』は、その名の通り“猫”の気まぐれでいたずらな感じを音楽で表現していて、とてもキュート。オスカル・ヴァルダンブリーニのフリューゲル・ホーンも柔らかな音色を響かせている。

これらの作品で忘れてならないのはブルーノ・ニコライの存在。ニコライは自らも多くの映画音楽を手掛ける才人だが、ここではオーケストラ監督としてモリコーネを支えている。

以上紹介したのはモリコーネの魅力のほんの一部。手掛けていないジャンルがないといわれるほど圧倒的な数を誇る彼の映画音楽。そのヴァリエーションに富んだ作品群の中の隠れた傑作を楽しんでみてはいかがですか？



Singing Like Birds



ブロッサム・ディアリー…… 何と可愛らしい名前だろう。徳島のジャズ喫茶である夏の日に会って以来、彼女の小鸟のようなヴォイスに魅せられっぱなしだ。といっても最初に聴いたのはヴァーヴ盤ではなく「ヘイ・ジョン」や「サムバディ・ニュー」を含む彼女の自主レーベル、タフォデイル・レコードの一作目『ブロッサム・ディアリー・シングス』だった。ヴァーヴ盤までの彼女はジャズ・シンガーなのだが、'73年に出たこの盤からは、ポップス・シンガーになったといっている。日本のニュー・ミュージックに近いともいえるだろう。'73年といえば吉田美奈子やユーミン、シュガー・ベイブが発進した年。都市を包むある透明な空気に反応した歌手は、アメリカにもいたのである。ジョニ・ミッチェルやキャロル・キングよりも暖かくウィットに富んだ歌声。彼女の声に包まれているとすべてを忘れてしまう。時間も場所も。

そのわけは彼女の経歴に見てとれる。ニューヨークで生まれ、父はスコットランド、母はノルウェイ。'40年代からカクテル・ピアニストとして、あるいはヴォーカル・グループで歌い、'52年にパリへ渡ってブルー・スターズに入る。'56年に帰国してヴァーヴと契約するまでのパリ時代が彼女のすべてを形作ったようだ。エスプリに富んだ詞、洗練された唱法、カクテル・フィーリングを漂わせるお洒落なピアノ、すべてがシャンソンにはない幻想のバリ、ポップスやジャズにはない幻想のニューヨークの空に放たれているのだ。彼女のヴォーカルは硬直した音楽の圏境を越えていく。

夏の昼下がりに、どうしようもないアンニュイな気分ときには彼女の初々しいヴァーヴ盤でも。きっと不思議なソーダ水のように瞳を冷やしてくれるだろう。そして夜が更けたらもちろんダフォデイル盤で赤ワインを……



'91



- De la soul is dead/De la soul
- Breaking atoms/Main source
- Young idea/Young disciples
- And now the legacy begins/Dream warriors
- Do the skate/Skatemaster tate
- Blue lines/Massive
- Positive reaction/Caveman
- Checkmate/Night trains
- The call is strong/Carlton
- In pursuit of the 13th note/Galliano
- Derelicts of dialect/3rd bass
- Mr. hood/K.M.D.
- Peachfuzz/K.M.D.
- Who me?/K.M.D.
- Black whip/Chapter and the verse
- Secret code/Jazz documents
- Jazz thang/2 tuff
- Jazz it up/Crazy french man band
- Syncopated, noisy, music/PD three
- Lovesick/Gang starr
- Chief inspector/Warry badarou
- Blue/Caron wheeler
- Love or nothing/Diana brown & barrie k. sharpe
- The world is a ghetto/Will downing
- Positive/Working week
- Modal/The quiet boys
- The spoken word/Vibes alive
- All that jazz/Roger sanchez
- Everything's goin' to the beat/Ace of clubs
- Make way for the originals/Izit
- Jump around/London posse
- Echo chamber/Beats international
- The hip hop band/Stetsasonic

Surprises...Surprises...Surprises...

ゾクゾクするようなシンバル・ワークに始まる哀愁のジャズワルツの演奏シーンと、白いセーター姿がチャーミングな長い髪の美女たちを、短いカットでつないだオープニングから、これはもう完璧な映画。'65年にリチャード・レスターがロンドン各地にオール・ロケを敢行し撮り上げたニュー・ルックのスラップスティック・コメディ、『ナック』。30年近くも前にこんなにもお洒落でヒップな映画が作られていたなんて！ とふるえるような感激におそわれてしまう。

モノクロームのスクリーンにあふれる洗練されたモダニズムの香り、そこはかたなく漂うサイレント風味。が、何よりも感動してしまうのは、ヴィジュアル・エディットを駆使したレスターのスピーディな演出スタイル。何てことはない市民のコメントがドキドキするほど刺激的にカラーージュされたり、コミカルな視覚ユーモアとポップなマリナーの響きが絶妙にミックスされたり。ときおりみせるフィルム・リヴァースもファニーなリズム・アクセントになっていて楽しい。

音楽担当はジョン・バリー。イギリスらしいせつなさを感じさせる女声コーラスやオルガン、ミュート・トランペットが印象的。バーナード・ハーマンのサスペンスとヘンリー・マンシー二のリリズムを掛けあわせたようなシャープなジャズ・サウンドだ。様々なアレンジを変えて演奏されるテーマ・メロディが深く胸を打つ。

それにしても、映画の後半、冴えない風貌のマイケル・クロフォードとリタ・トゥシンハムが一緒にいるのを見るだけで、こんなにもときめいてしまうのはなぜなのだろう。そしてエンド・タイトル。完璧なアート・センスでデザインされた画面は、どんなに誉めても誉めたりないこの映画の中でも、最大の観どころかもしれない。

'60年代「スウィング・ロンドン」のポップな輝きの結晶とでもいべきこの映画、とりあえずは今年の夏の上映をお観逃しなく……



VIVA KNACK!

SUBURBIA SUITE Summer Beauty Issue 1991. 7. 10

EDITOR:

橋本 徹

DESIGN:

今村 哲子

WRITERS:

大久保寿則 下坂裕昭 薄田育宏 鈴木千晴 橋本 徹

GUEST:

サエキけんぞう

THANKS:

小西康晴

SUBURBIA SUITEでは読者の皆さんの御意見、御感想をお待ちしています。STAFF、WRITERも募集していますので、下記の連絡先まで御一報ください。

〒161 東京都新宿区下落合3-5-7-203 ☎03-3952-5274 橋本 徹

cool wave...



SHIPS LTD.